

PANTONE 1575C

PANTONE 421C

PANTONE 423C

PANTONE 367C

New York

現代アートと 色がちりばめられた、 NYのタウンハウス

「とにかく色が好き」というインテリアデザイナーが作る家は、
家族を幸せにする、遊園地のようなベントハウスだった。

Photos ERIC LATIGNEL/TRIPOD AGENCY Original Text IAN PHILLIPS

Colour Scheme

この部屋の色のポイントはオレンジ、グレー、シルバー、黒の配色は、オレンジにマッチし、全体の陽気な雰囲気を表現している。NYのギャラリストは自由で大胆な色彩感覚で、現代アートと暮らす楽しさを教えてくれる。植物のグリーンや白の差し色が新鮮さをプラス。

玄関ホールは決まって、 オランダの色、オレンジ!

オランダ人のインテリアデザイナー、ギラン・ヴァイヤスは祖国の色であるオレンジを玄関に使用。グラフィックデザイナーの夫が、紋章のパターンを起こして壁紙にしたものだ。飾られたアートはブラジル人カメラマンVik Munizによるセルフポートレート。ピンボン玉を使ったシャンデリアは、Marcia ZiaとPaul Privenのデザイン。

個別の部屋には、
一色カラーを決めて遊ぶ。

右ページ 黄色いカウンター、朱色のダイニングテーブルなど、まぶしくらいに鮮やかな色使いでまとめられたキッチン&ダイニング。左ページ 天井から吊るされた発泡スチロールの彫刻は、アーティスト、ジェイソン・レンジャー作。キッチンの一部に見える黄色のソファはアントニオ・チッテリオのデザイン。



個別の部屋には、
キーカラーを決めて遊ぶ。

右ページ 壁と床はブルーストーンを使用。椅子は木製のヴィンテージをビニールに張り替え、ペイントしたもの。壁の作品は、英国人アーティスト、リチャード・ウッズ作。左ページ 上 息子たちのプレイルームには、壁に沿って赤のボダーを入れることで空間をボリュームアップさせた。照明はバーナー・バントン、赤の椅子はギデオン・クラマー作。手前左に見えるロッキングチェアはヴィンテージ。下 ゲストルームは、緑で統一。アンディ・ウォーホルによるエルビスが意のスクリーンに、椅子は紺野弘通の「Bin」チェア





本棚は、青と黄色のワンダーランド!

特注の本箱には背景にスタジオプリントワークスの壁紙を貼って完成。もともと持っていたアームチェアは、ギーランがエリテリス社のコットン地で張り替えた。ウール製ジャギーラグの色使いは、ページがギーランに見せたインコの写真からのインスピレーション。

南国のビーチの風が吹く書斎のデスクまわり。

壁の写真はルーク・ロスの「Untitled (Beach)」。椅子はイムズ、デスクはロバート・オースティン・ゴンザレスのデザイン。天井から下がる羽根付きの照明は、ベンジャミン・ノリエガ・オーティスとスティーブン・ワイン作。

ビル一棟のタウンハウスは、部屋ごとに色、色、色!

NYを拠点に活動するインテリアデザイナー、ギーラン・ヴィンヤスに、なぜ「色」が好きなか聞いてみた。「わからないけど、生まれつきなんだと思う」と彼女は言う。母親から怖いもの知らずの性格を受け継ぎ、子供の頃はクレヨンを見ると信じられないほど心が躍ったのを覚えている。「塗り絵は私にとって宝物だった。なぜ皆が原色を恐れるのか理解できない。「森を歩いていて熊に襲われたら怖いだろうけど、なぜ色が怖い?」色は私たちをハッピーにしてくれるものだと思おう」

彼女の最新プロジェクトの一つはNY、トライベッカの1440㎡もある6階建てタウンハウス。オーナー夫妻はデベロッパのJ・C・ケーラーとチエルシーにミクスストグリーンスギヤラリーを経営しているページ・ウエストだ。建物は1915年に建てられた倉庫で、崩れかけていたものを建築家、ピート・ゴースリーが甦らせた。もとの骨組みのうち梁の70%とレンガの外壁3面のみを残し、屋上にペントハウス、またその上にルーフガーデンを増築。1、2階は客用、上の4階分を家族用とした。

素晴らしく奇抜なこの家において

家のインテリアの最初のイメージが、リサ・ルイターの絵「Hoodlum」。「鮮やかで楽しい」こんな家になったら、引越す前から飾ると決めていた。



も、原色は大きな役割を果たしている。玄関にはオレンジ色の紋章柄を壁紙にして貼り、息子のプレイルームは赤い2本のポーターが部屋をぐるりと囲む。ブルーの書斎も圧巻だ。部屋作りはページが雑誌にあったインコの写真をギーラン見せ「鮮やかな青と黄色。ふわふわしていてゴージャス。部屋をこんな感じにしてほしい」と伝えた。「そうしたらギーランはターコイズ色の羽が生えた大きなランプを探してきたのよ。そう、この家には予測不能の突飛で楽しい工夫がいっぱいなのだ。「風変わりなものを見つけたのが大好き」とギーランも言う。

家主ギヤラリー経営者であることを考えればこの家でアートが大きな役割を果たしていることは不思議ではない。玄関から息子の部屋までアートが飾られていない場所はないほど。この家の内装プランが始まる前から、ページが飾ると決めていたのが、キッチンにある鮮やかな黄と赤のリサ・ルイターの絵「Hoodlum (不良)だ。鮮やかで楽しく、どんな家にしたかったかを表した絵。この家はそのとおりになったわ」